



ロマンを追って

元大分市長 上田 保物語

第七章 「ハリキリボーイ」



デジタル版初版発行：2008 年 4 月 25 日

●書籍案内

「ロマンを追って
一元大分市長上田保物語」

著者：中川 郁二

A5 版 194 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2003 年 2 月 15 日

定価：1600 円（税込み）

購入問合せ：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ

TEL：097-538-9662 「合同新聞の本」Web ページ



※奥付け／デジタルブックについて

- ・ 火の玉投手” 荒巻
- ・ 愛弟子
- ・ 三つ巴戦
- ・ “辻説法” “草の根”
- ・ 初の“洗礼”
- ・ 助っ人、川上勘一
- ・ 名コンビ誕生
- ・ 市民の声を聞く場
- ・ 散歩視察
- ・ 公園市長

第七章 ● 「ハリキリボーイ」

発刊に当たって

▽月刊誌「ミックス」(大分合同新聞社発行)で連載した「政治は創造なり・元大分市長上田保物語」(2001 年 5 月号～2002 年 4 月号)に若干手直しを加え、改題して 2003 年 2 月に書籍「ロマンを追って一元大分市長上田保物語」を発刊。その書籍をデジタル化したのが、今回のデジタルブックです。 (本書に登場する人物の年齢や肩書き、施設名称等は、「ミックス」連載時点のもの)

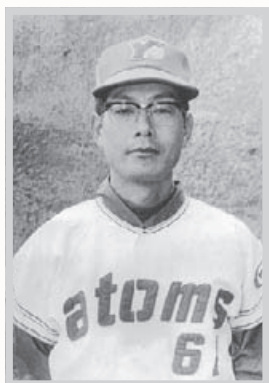
第七章「ハリキリボーイ」

“火の玉投手” 荒巻

昭和二十二年（一九四七）、人気歌手笠置シズ子の「東京ブギウギ」が爆発的なブギブームを起こし、ラジオからは菊池章子が歌う「星の流れに」のけだるい声流れ出す。書店では、発売されたばかりの太宰治の「斜陽」、田村泰次郎の「肉体の門」が飛ぶように売れた。

大分県からは野球界に彗星のように現れた荒巻淳（大分経専Ⅱ現大分大学経済学部Ⅱの野球部）がマスコミの話題をさらった。前年の全国専門学校野球大会西部予選の決勝で、大分経専が鳥取経専を二―〇で破って優勝し、大黒柱の荒巻投手が二十三の三振を奪い、ノーヒットノーランの快挙を成し遂げたからだ。彼は、大分経専卒業後、別府星野組に入社。二十四年の都市対抗全国大会優勝の原動力となり、橋戸賞を受賞。翌年、プロ野球の毎日オリオンズに入り、左腕から繰り出す快速球は“火の玉”の異名がつき、最優秀選手にも選ばれている。ヤクルト・アトムズの投手コーチ時代の四十六年、肝硬変を患い、四十四歳の若さで他界する。

大分市中心部の戦災復興事業は徐々に進み、撤去されるバラツ



投手コーチ時代の新巻淳

ク小屋に代わって木造の商店や民家が立ち並び始めた。戦後初の公選市長選や市議選を目前にして、市内は選挙ムードが一挙に高まってきた。

「上田保、大分市長選に出

馬」という情報は、地元畑中の有力者を通して南大分全域に野火のように広まっていく。

保に嘉永井路の改修を依頼した下宗方の河野勇（大分刑務所勤務）や改修工事の現場監督を担当した西野武雄らが保の手足のように動き、選挙長には南大分で砂糖の商売をしていた美濃春生が引き受けた。美濃は戦前から民事で保の世話になっている。

強力な支援グループの中核と

なったのは、嘉永井路の改修で最も恩恵を受けた下宗方や八幡田、下小野鶴の農家や南大分の青年団。青年団員のなかには、秦一人（市職員で後の市収入役）や工藤秀明らがいた。

愛弟子

なかでも、工藤は南大分の永興村（現大分市）出身で、彼の父正平は大分市長選後の大分市議選に立候補して初当選している。大分県師範学校付属小学校から師範へ進んだが、「肌が合わぬ」と中退。かねてからあこがれていた東京・立川の陸軍航空学校の試験を受けた。大分であった一次試験に通ったものの、航空学校での二次試験（目の検査）で落とされた。失意のどん底にいたところに終戦を迎える。



建設されている大分市中心部の商店街



地場経済界の重鎮
一丸伍兵衛



社会党のホープ
江藤 庵

三つ巴戦

戦後、工藤青年は父が経営する旅館の手伝いをしたり、建設業を手がけるが、陸軍航空学校にふられたショックが癒えず、その屈折した心情を「元氣もん」として発散する。そこへ現れたのが、保だった。息子に持て余した正平が親しい保に「なんとか、あいつを一人前にしてほしい」と懇請したいきさつがある。以来、保は正平に代わって、この「元氣もん」に遠慮会釈もなく叱咤する一方、物心ともに支援する。

実業家工藤はその後、大分市議（昭和三十四年（一九五九））、大分県議（三十八年）と地方政治家の道も歩み、四十三年にはテレビ大分社長に就任する。代表取締役会長の工藤は「現在あるのは、上田先生のお陰」といってはばからない。彼は保の愛弟子の一人である。

県内の大分市を含めた五市の戦後初の市長選挙は三月二十日に告示され、大分市では上田保（自由党）、衛藤庵（社会党）、一丸伍兵衛（無所属）の三人が届け出た。

一丸は大分町・竹町の呉服店経営森百太郎の三男で、叔父の三代一丸伍兵衛

の養子となる。昭和の初めに株式会社一丸を創立し、十年に県下初の本格的なデパートを開業した。市議会議長、大分商工会議所副会頭を務めている。

衛藤は大分市長代行助役で社会党のホープ、一丸は地場経済界の重鎮。両候補とも、これといった人脈も組織力もない保にとって、強敵である。下馬評でも、インテリ層や革新系諸団体の支持がある衛藤が断然有利だった。

“辻説法” “草の根”

だが、告示日には、大道町に設けた保の選挙事務所やその周辺は、南大分から駆けつけた雲霞の如き支持者たちで埋まり、熱気に包まれた。必勝と書いたはちまきを締めた保は壇上に立ち、マイクなしで第一声を上げる。

終戦から一年半も過ぎていのに、焼け野原の大分市の復興は遅々として進まず、底の浅い経済力がうかがわれ、いても立つてもおられぬ思いだ――とまず出馬の動機を述べ、大道峠の下にトンネルを掘り、臨港線を通し、国有林の払い下げで安い木材を市民に提供する――という公約を強調した。ややかん高いが、よく響き通る声で理路整然と述べる保のあいさつに、支持者たちは「さすがは弁護士、予想外に弁がたつ」と喜んだ。

さらに支持者たちの目を見張らせたのは、この後、保が付き添っていた千鶴子とともに“辻説法”を敢行したことだ。二人三脚で辻説法して回ったのは、投票日前日までに約二百力所に及び、有権者たちには斬新な印象を与え、どこでも評判になった。

この間、下宗方の支持者たちはコメや野菜などを河野勇の家に持ち寄っては炊き出し、それを大道町の選挙事務所に運んだ。また工藤ら青年団員たちは手書きのポスターをあちこちに張って回ったり、トラックで応援演説をぶち、各地で集会を開いていった。今でいう「草の根選挙」を地で行ったわけである。

これに対する衛藤、一丸両陣営は組織選挙に終始した。とりわけ、社会党の衛藤陣営では、同時に行われた知事選で、現職で無所属の細田徳寿が社会党推薦の安田幹太を上回る勢いだったため（結果は細田の勝利に）、県都の市長ポストだけは確保しなかった。傘下の各労組に票固めの檄（げき）を飛ばした。

初の“洗礼”

投票は四月五日に行われ、結果は次の通りになった。

当 上田保	一万五七六二票
次 衛藤庵	九〇九四票
一丸伍兵衛	六〇七四票

保は最有力とみられていた衛藤に大差をつけて当選した。選挙初の「洗礼」である。選挙事務所内は支持者たちで沸き返り、保は握手攻めでもみくちやにされた。次々に駆けつけてきた新聞記者たちに、上気した保は「私のために山南部（南大分）の人をはじめ友人諸君が骨身を惜しまず働いてくれた真剣な態度に泣かされています。市長になった以上、市民にお約束したことは、どんなことをしても実行する決意であります」と一気に語った。保、脂の乗った五十三歳のときである。

当時、県立別府高等女学校（別府鶴見丘高校の前身）の校長をしていた安東玉彦は、当選祝いにと大分市西春日の上田家を訪れた。家の中は当選を喜ぶ南大分の支持者たちでこった返し、保とゆつくり話す機会もない。その夜は泊まることになり、保と枕を並べた。寝入りばなに保が安東に話しかけてきた。

「君、校長ちゅうのは辞められんのか」

「校長に留任と決まったばかりですからな」

会話はそれだけだった。それから数日後、別府の校長官舎にいた安東に呼び出しの電話がかかってきた。また、例の話かなと思いながら安東が上田家の門をくぐると、玄関先で待っていた保は「君、遅いじゃないか。あつけにとられる安東に、保は「君、助役になつくれんか。もう決めちよるからな。その

つもりでおつてくれ」と
追い打ちをかけた。

安東はいったん断った
が、保の方は一步も引か
ない。保は弁護士時代か
ら付き合ってきた安東に
自分がない特質を見いだ
していた。彼の石橋をた
たいて渡るような慎重さ
と根回し（説得力）の特
技は、猛者ぞろいの議会



保らの初当選を伝える大分合同新聞(昭和22年4月6日付)

の応対に打ってつけと踏んだのであろう。

遂に根負けした安東はかつて児童雑誌「青い空」の出版で世話になった植木栄助や後藤肇（建設会社社長）、藤井文雄（大分県師範学校の先輩で教師）らに相談し、結局引き受けることになった。

市長選に落選した衛藤は直ちに大分市議選（投票日は四月三十日）に立候補し、最高得票で当選している。選ばれた新議員は衛藤を含め三十六人。政党の内訳は自由党の八人を筆頭に民主党五人、社会党三人、協同党一人、無所属十九人。上田市長のいわば「親衛隊」である南大分の議員は工藤秀明の父正平ら九人で、全体でも与党議員が多数を占めた。

助っ人、川上勘一

市長選、市議選後の臨時議会は五月十日に開会し、壇上に立った新市長の保は「私が公選市長の上田保であり、至って頭が悪



市長室で執務する保

く腕も鈍くて、十万市民の市長として、その資格がないことは十分自覚しております。しかし、人一倍、愛市の念に燃え、やむにやまれない気持ちで立候補しました。市長に選ばれた以上、馬車馬になって公約の実現のた

めに働きたいと考えております」と所信を述べた。

この保の就任あいさつに議員席で感銘を受けた新進気鋭の議員がいた。後に陰になり日向になって保を支援する川上勘一である。臨海工業地建設や市町村合併といった重要案件の立案の際には必ずといっていいほど、保は川上に相談した。そのとき、川上はいつも柔和な表情を崩さず、こう言って保を励ました。「おやりなさいよ」。

へ川上は明治三十九年七月二十四日、大分市新川の半農半漁の家に生まれた。父利作、母エイの長男で、ほかに姉二人と弟二人、妹がいた。青少年時代は家業を手伝っていたが、昭和十二年、日中戦争に野砲兵として応召。中国大陸で転戦し、大分連隊区司令部付のときに終戦を迎える。

復員後、地方政治家を志し、二十二年から四十八年まで市議を務め、この間、市議会議長、自民党大分市支部連合会長を歴任。頭の回転は速く、動作も敏捷だった。四十二年、水道料金値上げ問題で議会が大荒れしたときだ。保守系議員が強行採決しようとしたのを、革新系議員や組合員たちがピケを張り、議長の入室を阻止した。議長川上は身軽にベランダ沿いにするすると議場に入り、反対派をあ然とさせている。



大分市議に初当選した
川上勘一

上田市政とこれに続く安東市政にとつては頼りになる人物だった。昭和四十五年に大分合同新聞文化賞受賞。平成八年十二月十四日、自宅で死

去。九十歳。川上の長男利昭（七〇）Ⅱ大分市新川Ⅱは「父は市民には分け隔てなく接し、来客があれば職業を問わず、座敷に上げて歓待していた」と振り返る」

名コンビ誕生



助役になった安東玉彦

先に紹介した臨時議会では、市長保は助役に安東を専任する人事案を提案した。早速、社会党の衛藤庵、甲斐樗英、桑原益蔵三議員が「校長の助役では務まらない。助役は部課長級から選べ」と異論を唱えたが、結局全会一致で同意。ここにまれにみる上田・安東の「名コンビ」が誕生した。上田市政が数々の実績を残すことができたのも、得難い「女房役」安東がいたからこそといっている。

市民の声を聞く場

保は初登庁の日から張り切った。「毎月、第二と第三日曜日に市長室を『市民の声を聞く場』にする」と宣言。その日になると、彼一人で午前八時に登庁。列をなして押し掛けて来る市民一人ひとりから注文や苦情を聞いた。

月曜日朝には、担当部課長が市長室に呼び出され、市民からの声を下敷きに指示が次々に飛ぶ。また某課長には、「ね、君、学校の講堂を使用するのにどうして七つのハンコが必要なの？

こげんこつち、どうなるんかい。早速、市の使用条例を改正しなさい」と「雷」が落ちる。

保は初めて上京した際、真っ先に当時の法務省を訪れ、法務総裁の殖田俊吉に大分刑務所の河野勇を退職させてくれと頼み込んだ。殖田は木下郁の従兄弟で、在京大分県人会「両豊倶楽部」を通じて親しい仲になっている。

殖田は理由も聞かず、その通りにすると即答した。他の用件を済ませ、帰京した保はすぐ、大分刑務所の河野を市長室に呼び寄せ、「秘書課長をやってくれ。君の身分については、殖田総裁と話がついている」と要請した。保流の「即断即決」だった。こうして、河野は二十二年六月から約一年間、秘書課長を務め、また大分刑務所に復帰する。

散歩視察

保は毎朝、歩いて登庁する。西春日の自宅から荷揚町の市役所までだが、歩くコースが日毎に変わる。時には、かなり遠いところまで歩いている。職員たちの間にも「新市長は健康保持のために励行しているんだな」と評判になった。

だが、健康以外の目的が分かってきた。市長室に呼ばれた担当職員たちは「君、▽▽の場所に家庭用ごみが放置されているじゃないか。すぐ、回収しなさい」「君、○○通りの街路樹の枝が伸び放題だよ。みつともない。すぐせん定しなさい」としぼられる。

次第に音を上げる職員も出てきて、「ハリキリボーイの新市

長についていけない職員もいるようだ。飛躍する前に「同志の納得」を考えるべきではないか」と指摘する新聞記事もあった。ここで、助役安東の出番になる。彼は保に「細かい点は私に言ってください。私が直接指示しますから」と申し出、以降はそうようになった。職員の不満も次第に解消し、安東は「潤滑油」の役を演じていく。

以前の市長は市議員たちに担ぎ出されたケースが多かっただけに、上京する際には有力議員を連れて行ったり、委員会が終わるたびに料亭で一杯という風潮があった。保はそれらをいっさいやらなかったため、「今度の市長は議会の慣例を無視する」と風当たりが強かった。この風当たりを和らげるのも、安東の役目だ。教員時代から培ってきた説得力。保が苦手とする分野を補って余りあった。

だが、保、安東の絶妙コンビもときたま、意見の食い違いが生じて破綻した。二人とも強情なため、口をきかぬときがしばらく続くが、いつも先に折れるのは保の方だ。彼はとってつけたような笑みを浮かべながら、「安東君、こんな本が出ているよ」と新刊本を手にして助役室に入ってくる。それで二人はまた、元の鞘に戻るのである。

“公園市長”

この時期、保は公園造りに熱を入れる。彼が手がけた公園のなかで、最もユニークなのが、都町の「ジャングル公園」だ。「ほとんどの人が自分の庭木の名前を知らない。あんまりじゃ



現在のジャングル公園

ないか」と彼は庭木を集める公園を思いつき、大分大学の野口彰教授と一緒に県内の山を見て回り、各営林署に樹木の提供を依頼した。こうして、六百三十種の樹木を集め、二十七年、五千七百平方メートルの「ジャングル公園」を開設した。一本一本の樹木には、名称や由来、原生地など保自身が調べた説明書きが付き、話題になった。

このほか、若竹公園（二十三年）、大津公園（二十四年）、遊歩、子鹿、春日、小ぼと公園（二十六年）、若草、大手、坊ヶ小路、城崎公園（二十七年）など、次々と公園を建設し、「公園市長」のニックネームまでついた。

保の公私の峻別ぶりはつとに知られている。彼の元で財政課長を務めた姫野太之（八一）Ⅱ大分市上野丘Ⅱは「何度か上田市長にお供して上京したことがあるが、いつも安い木賃宿ばかり利用しておられた。娘さん（千鶴子）が結婚した後は嫁ぎ先

の平松家（東京・目黒）に泊まり、無駄な出費はしなかった」と回想。

また、平松守彦（現大分県知事）の従兄弟で後にマリンパレスの社長になる二宮吉男（現代表取締役会長）は「上田社長はマリンパレスの売店で来客用の菓子、土産類を購入する際にでも、

ご自分のポケットマネーで支払っていた。公私のけじめは極めて厳しく、几帳面。百円台の金額の物まできちんと領収書を取り、保管されていた。お仕えして『そこまでしなくても』と何度も思ったことがある」と顧みる。

N



オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタル版「ロマンを追って—元大分市長上田保物語—」 第七章●「ハリキリボーイ」

2008 年 4 月 25 日初版発行

著者 中川 郁二

原著 2003 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社／製作：大分合同新聞社文化センター／印刷：佐伯印刷

《デジタル版》

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内）

© 大分合同新聞社

著者略歴 ◇ 中川 郁二
一九三七年生まれ、別府市出身。福岡県立修猷館高、早稲田大学卒。民間企業勤務を経て、大分合同新聞社入社。報道部長、別府支社編集部長、読者情報部長、論説委員、編集委員。